

戦史
分析

A BRIDGE TOO FAR

マーケットガーデン作戦

OPERATION MARKET GARDEN

その作戦はわずか2日で終了するはずだった。
そして作戦が成功すればクリスマスまでに
戦争は終わるはずだった。

空挺部隊と機甲部隊、
空地一体となった電撃的進攻作戦は
なぜ潰えたのか。

連合軍の大誤算「遠すぎた」ドイツ本国への「橋」

文=佐藤俊之



一九四四年九月十七日。暖かく静かなヨーロッパの秋の日曜日だった。この日、オランダに一万五〇〇〇のパラシュートと数百機のグライダーが舞い降り、同時にイギリス第30軍団を主力とする機甲部隊が、ライン川を目指して進撃を開始した。連合軍による、まさに史上最大の空挺侵攻作戦が始まったのだ。

ノルマンディーの戦いで三〇万を超える損害を出し、ライン川まで敗走したドイツ軍にとどめの一撃を加えるべく行われた、この「マーケット・ト・ガーデン」作戦はしかし、連合軍にとって西部戦線で唯一の敗北という悲惨な結末を迎えた。そして今日、この作戦はわずか一週間で準備され、イギリス第1空挺師団をドイツ軍のSS装甲部隊が待ち受ける死地へと送り込み全滅させた無謀な攻撃として、今日まで伝えられている。

しかしなぜこのような作戦が立案、実行されたのだろうか。そこにはどのような



笑顔みせるグライダー内のイギリス落下傘兵。彼らの行く手に待つのは……

一九四四年秋『戦略的状況』

蔓延する楽観主義

ノルマンディー戦で勝利をおさめた連合軍は、勢いに任せて逃げるドイツ軍を追撃

戦略目標が、成功していたら、なにが起きていたであろうか。そしてまた、なぜ第30軍団は第1空挺師団を救うことができなかったのであろうか。

した。連合軍部隊は英仏海峡から順に、カナダ第1軍が沿岸の港湾を、イギリス第2軍がベルギーを、アメリカ第1軍がルール地方を、そしてパットンの第3軍がアルザ

ス・ロレーヌをそれぞれ目指し、八月二十三日から九月四日までにフランスおよびベルギー全土からドイツ軍野戦部隊を追い出した。また八月二十五日に南仏へと上陸した米第6軍集団は自由フランス第1軍と米第7軍を率いてドイツ国境へ向けて進撃を開始していた。

夏の間に三〇万以上の兵力を失ったドイツ軍には、もはや戦争を遂行する力はないと、連合軍の首脳部は考え始めた。無理もない。ノルマンディーにおいて予想もしなかった苦戦を二か月続けた後で、わずか二週間でパリからドイツ国境まで進撃したのだ。

前線の兵士から、連合軍総司令部、そしてイギリスおよびアメリカ政府に至るまで「この戦争は年内に終わるかも知れない」という楽観主義が生じてきた。

進撃の疲れと、このような楽観主義によって、連合軍の突進は鈍りつつあった。カナダ第1軍は九月四日にアントワープを占領したが、この勝利の後、疲れ切った戦車兵たちは泥のように眠り、ドイツ第15軍の退路を塞ぐことができなかった。イギリス第2軍はブリュッセルで解放の喜びに沸くベルギーの民衆に囲まれ、オランダへ逃げるドイツ軍を取り逃がした。またアメリカ第1軍は不用意にアーヘン地区の森林地帯へ突入し、激しい反撃に出くわしてしまった。九月、順調に破竹の進撃を続けていたのは、実はパットン率いる第3軍だけだったのである。

進撃停止

そしてそんなとき、さらなる伏兵が連合軍の進撃を阻んだ。補給である。連合軍の快速進撃は兵站部の予想を超えてしまっていたのだ。ドイツ軍が補給に利用していたフランスの鉄道は、戦術空軍の絶え間ない爆撃とレジスタンスの破壊活動で麻痺状態だった。前線に近い港湾がまだドイツの手にあったため、物資は相変わらずノルマンディーの海岸とシェルブルール港から、はるばる前線まで、トラックを使って運ばねばならなかった。

米軍の兵站部(COMZ)はノルマンディー作戦開始時に、連合軍のセーヌ川到達をD+90日(九月初旬)と想定し、その時点で二二個師団を維持することを目標として補給計画を立てていた。だが実際は、セーヌ川到達は一六個師団でD+70日に達成され、米軍はD+90日には二〇個師団をもって三〇〇キロも先へと前進し、ドイツ国境まであと一〇〇キロを切っていたのである。イギリス軍もベルギーに到達するころには、同じ問題に悩まされていた。あまりにも長い補給距離にトラックは不足し、また進撃が速かったため、補給部隊が指定された集積所へ到着すると、そのころには戦闘部隊がさらに前進してしまっていた。油送用のパイプラインの建設も始まったが、作業は遅々として進まなかった。せっかくながら占領した巨大港アントワープは、ドイツ軍がいまだにスヘルデ河口を押さえ

A BRIDGE TOO FAR

ているため使用不能だった。

この予想外の補給状況に対処するため、COMZは新たにフランスへ上陸した三個歩兵師団からすべての車両を取り上げ、「レッドボール・エクスプレス」と呼ばれるトラック部隊と彼ら専用の道路網を創設、二四時間態勢で米第1軍と第3軍への補給を賄おうとした。戦車輸送用の五〇トン大型トレーラーを、移動式集積所として使用するという苦肉の策まで生まれた。一方、英第21軍集団も、オコナー中将の第8軍団に進撃を停止させ、補給を必要とする前線部隊を削減し、さらに輸送車両を補給に転用することで対応した。

このような手段をもつてしても、八月の終わりにには補給は危機的状況を呈していた。パットンの第3軍は進撃のために一日四〇万ガロン（約一五〇万リットル）の燃料を必要としていたが、実際に届いた量は一日五万ガロンを下回った。第1軍、および第21軍集団も同様で、補給部隊は弾薬や消耗品の補充を減らし、燃料の割合を増やしたが、問題は解決しなかった。

そして九月五日、進撃は止まった。補給の不足だけでなく、ドイツ軍が部隊を立て直し、抵抗を強めてきたためでもあった。しかし、補給の問題で頭が一杯になっていた連合軍司令部は、ドイツ軍が息を吹き返しつつあるという事実を認識していなかったのだ。そして補給の問題さえ解決すれば、進撃を再開できる。そう考えていたのである。

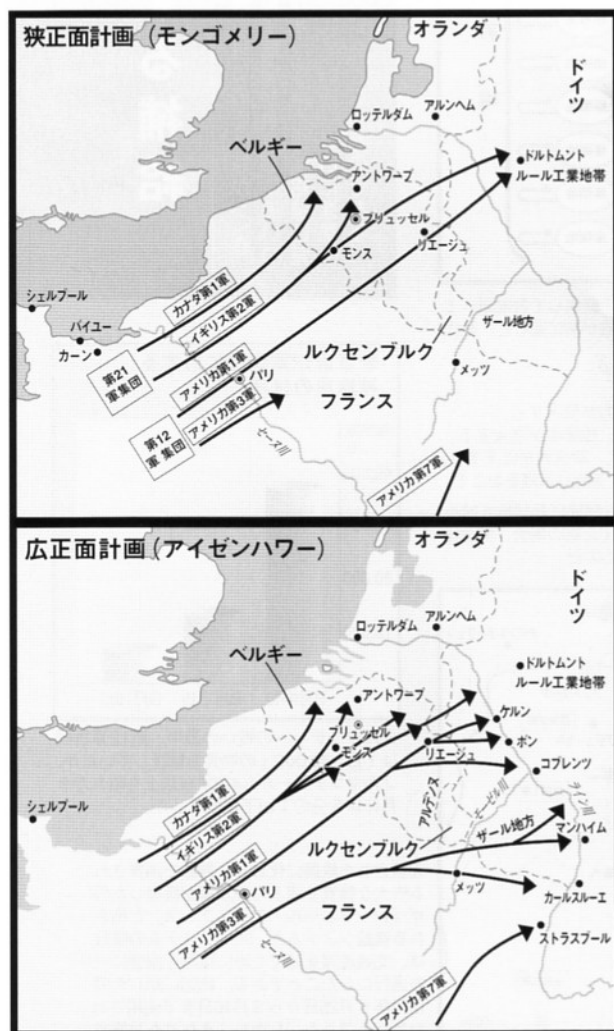
史上最大の空挺作戦へ『作戦立案の過程』

モンティとアイク

九月一日、総司令官アイゼンハワーは、連合軍の地上部隊をも直々に率いることになった。それまで総司令部の下で「地上軍総司令官」として指揮を執ってきたモンゴメリー将軍は、第21軍集団司令官としてイギリス連邦軍だけを指揮下におさめることになった。

イギリスのメデアや大衆がこれを「降格」とみなさないようにと、アイゼンハワーはモンティを讃える演説を行い、英国首相チャーチルは九月一日付で彼を元帥に昇進させた。ところが、このことが新たな問題を生じさせてしまったのだ。

連合軍に蔓延する楽観主義には、上層部にまで及んでいた。もちろんモ



モンゴメリーはファレーズの戦いが終わる前の八月十七日に「連合軍は広く浅く前進するのではなく、一本か、あるいは隣接する二本の攻撃軸に集中すべきだ。そしてそれはドイツ北部へ向けて行われるべきだ」と第12軍集団司令官ブラッドレーに話し、この主張は八月二十三日にアイゼンハワーに対しても行われた。

モンティの戦略には三つの目的があった。まずドイツ軍の体勢が整わないうちにドイツ国内へ進撃し、ルール地方を孤立させること。ルール地方はドイツの工業生産のほとんどが集中している地域であり、ここを包囲すれば、ドイツは戦争継続が不可能に

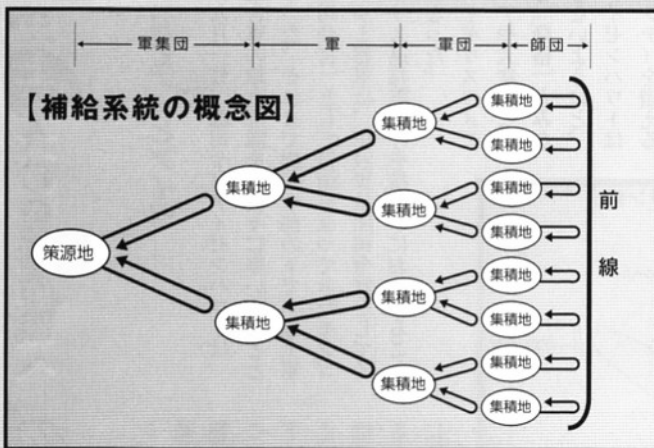
文中で述べたようにドイツに対する攻勢には『広正面』と『狭正面』の二つがあった。そしてその背景には英米の立場の違いが横たわっていたのである。

なる。次にアルンヘムに橋頭堡が確立できれば、いまだスヘルデ河口にいるドイツ第15軍八万の退路を完全に遮断できること。そうならば、アントワープを補給港として使用できるようになる。そして、ベルギーに位置する英連邦軍による大規模な突破作戦なら、このすべてを実現できるとモンゴメリーは考えたのだ。

それにドイツ軍がライン河畔の「ジークフリート要塞線」に立て籠もるなら、空いているオランダから側翼を迂回するのは当然の作戦である。イギリス軍は一九四〇年以来、北アフリカで何度もこうした片翼迂回作戦を行ってきたのだ。

だが、モンティのこの計画には危険が多かった。もし彼に「一刻も早いドイツへの進撃」を許せば、彼のいう通りに戦いは進展せず、アントワープへの入り江を塞いでいるドイツ軍の掃討は遅れ、補給に深刻な困難が生じるであろう。また北部に兵力を集中し、ベルギーとオランダを跨いでドイツに進撃すれば、これは補給上、必然的に小兵力による突破とならざるをえない。そうなればドイツ軍は進撃が止まった南方から予備を抽出し、突破部隊の側面は態勢を整えたドイツ軍の反撃に晒されるかもしれない。それよりも、全戦域で攻撃を継続し、ただでさえ少ないドイツ軍をさらに分散させるほうがよい。アイゼンハワーはこう考えていた。

またアメリカの他の将軍連やメディアは、英軍の攻撃は損害ばかり多く進展せず、モ



一般的な補給の流れは、図のようになる。策源地から集積地を経由して各部隊へと分岐していくが、この間をつなぐのが輸送部隊だ。さらに前線が前に進むと、輸送部隊と車両を増やさなければ兵站計画は破綻する。

兵站計画を破綻させる主な要因（敵の妨害を除く）

- 1) 集積地が増えると、そこで働く人員と車両が増え、輸送力が低下する。
- 2) 集積地を増やさなければ、一車両当りの行動距離が増え、故障率が增大する。
- 3) 車両を増やすと輸送部隊が消費する物資（主に燃料）が増え、輸送力が低下する。
- 4) 車両をいわずらに増やしても、適切な交通統制が無ければ、道路は渋滞をおこす。

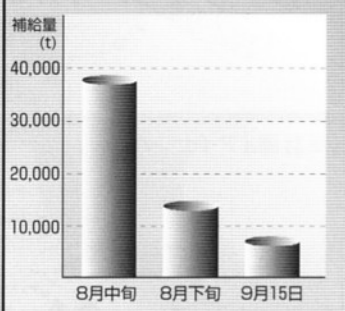
結局、作戦軍が統制可能で、前線部隊に物資が行き渡る適切な範囲に兵站線を結めるか、前線部隊の数を減らす必要がある。つまり1944年秋の連合軍の場合、策源地をアントワープに前進させるか、攻勢を抑制する必要があったのだ。



減少する補給

物が無いのではなかった。輸送機関が急進撃に追いつかず、部隊への補給量は減少していき、ついに進撃は不可能となったのである。

米軍第12軍集団に対する補給量の推移



ノルマンディーの戦いの最中、第12軍集団は1日、38,000 tの物資を輸送していたが、ノルマンディーから400km以上も離れた9月には5分の1以下に低下した。

破壊された鉄道に代わり、前線で消費される膨大な物資を運ぶため米軍が構築したのが「レッドボール・エクスプレス」と称される補給システムだ。このシステムの眼目は、交通渋滞を防ぐために道路を完全に一方通行にしたことである。地図に記したのは44年8月25日から9月10日まで使用されたルートである。しかし、それでも兵站基地から前線まで300km以上ある。



慎重な作戦を行うことで有名であったモンゴメリー元帥。
だが、彼が企画したドイツ侵攻作戦は、大胆不敵であった。

ンティは北アフリカでもシチリアでも、慎重すぎて鈍重な指揮官だったと考えていた。バットンの快進撃を停止させ「鈍重な」モンティに「大突破」を任せるなど、できる相談ではない。アイクは彼に「貴官の計画を支援するために米軍は進撃を停止できない。第21軍集団は、まずアントワープを補給港として確立していただきたい」と命じた。

モンゴメリーは八月二十三日の会談で自らの計画を縮小し、英軍の進撃にすべての米軍を従属させるのではなく、ホッジス將軍の第1軍から一二個師団を借りるだけでよい。さらに作戦の指揮はブラッドレーが行い、英第21軍集団は彼の指揮下に入ってもよいと「譲歩」の姿勢を見せた。だがこのとき彼が「作戦は自分か、あるいはブラッドレーのどちらか一人が統率すべきだ」と発言したことが米軍首脳部の響きを買って

決断

しまった。彼らはこの主張を明らかな「バットン外し」と受け取ったのである。アイゼンハワーはイギリスで待機中の空挺部隊をモンゴメリーに与えることには同意したが、米軍地上部隊による支援は拒否した。議論が続く間に、バットンは独断でザール川を渡り、対岸に橋頭堡を確立していた。

この泥試合に決着をつけたのは、意外にもドイツ軍の新兵器であった。九月八日、最初のV-2号ロケットがイギリス本土を攻撃したのである。この迎撃不能な兵器はオランダあるいはドイツ北部から発射された。イギリスをこの恐怖兵器から救うには、オランダへ進撃するしかない。

九月九日、追い打ちをかけるように、モンゴメリーはアイゼンハワーに対し「必要な支援が得られなければ、英軍は進撃もアントワープの確保も不可能である」との電報を打った。これでついにアイゼンハワーも決断し、「イギリス第30軍団と英米連合第1空挺軍によってオランダを速やかに解放し、ライン川対岸に橋頭堡を築く」という計画に同意を示したのである。

る。しかし彼はバットンへの補給を止めることは拒否した。

東西に数多くの河川や運河が走るオランダを攻略するには、空挺攻撃こそ最良の手段であった。特に重要なのがライン川の下流であるヴァールならびにネーダーライン川の橋梁確保である。ノルマンディー以来、イギリスで出撃の機会を延々と待ち続けていた空挺部隊の活躍の場がついに訪れたのだ。アイゼンハワーが攻撃を許可した背景には、戦いたくでうずうずしている空挺部隊に戦闘参加の機会を与えるためでもあったのである。

作戦に参加するのはホロックス中將のイギリス第30軍団とブレアトン中將の英米連合第1空挺軍。第30軍団には近衛機甲師団と第43、50歩兵師団が所属し、空挺軍にはリッジウェイ中將の米第18空挺軍団の二個空挺師団と、ブラウニング中將の英第1空挺軍団の一個空挺師団およびポーランド空挺旅団が配属されていた。

モンゴメリーは三・五個の空挺師団で、全長一〇〇キロに及ぶオランダの進撃路に架かる橋梁を占領し、そこを第30軍団の機甲部隊に一気に突破させようと考えた。空挺攻撃は「マーケット」作戦、地上からの進撃は「ガーデン」作戦と名付けられ、この作戦を支援するために数千両のトラックによって「レッドライオン」という補給組織が特別編成されることになった。

ついに戦史に名を残す一大作戦が開始されたのである。作戦決行日は九月十七日の

日曜日と決められた。準備期間はわずか一週間。モンゴメリーがいかに急いでいたかがわかる日数だ。そして、連合軍がいかにオランダのドイツ軍を侮っていたかということも。

バラシュートの絨毯

「マーケット」「ガーデン」作戦を要約すれば、以下のような攻撃計画であった。

一、九月十七日、三個の空挺師団がイギリスを発進し、オランダへ降下。第101空挺師団はヴィルヘルミナ、ツイト・ヴィルヘルム運河橋と、ドルメル、アーの道路橋を確保。第82空挺師団がマース・ヴァール運河橋、フラーフェのマース川橋梁およびナイメーヘンのヴァール道路橋および鉄道橋を占領する。英第1空挺師団はアルンヘムの道路橋と鉄道橋を占領し、市街に橋頭堡を確立する。ポーランド空挺旅団はアルンヘム確保後、道路橋の南岸に降下し、英第1空挺師団を支援する。

二、第30軍団はマース・エスコート運河の橋頭堡より発進し、空挺師団が占領している橋梁を渡ってアルンヘムに到達。第43および50師団の後続を待ち、ネーダーライン北岸の戦力を増強する。

三、英第8、第12軍団は第30軍団の両翼を援護して支援攻撃を行う。

四、カナダ軍は英軍左翼にてオランダの敵部隊を掃討する。

五、作戦は二日間、長くても四日間で作完する。

A BRIDGE TOO FAR

作戦は空挺部隊によって確保された一本の道路を、機甲部隊が突進するという一見シンプルなものだった。モンゴメリーは「重要なのは運河と河川に架かる五本の橋梁の占領だけである」と豪語した。しかし、ことはそう単純ではなかったのである。

まず問題となるのが確保すべき橋梁の数である。アルンヘムまでの進撃には、実は大小あわせて最低でも一本の橋を占領しなければならなかったのだ。さらにそのうちのどれかがドイツ軍に破壊された時を考慮し、近隣にある予備の橋梁も確保せねばならない。

さらに機甲部隊が通過する間、一〇〇キロにおよぶ進撃路を、重装備を持たないわずか三・五個の空挺師団、三万五〇〇〇名で守らねばならない。

つまり作戦の成否は、この地区に有力なドイツ軍部隊がないというのが大前提なのである。降下部隊の任務は、オランダに降り立ったら即座に与えられた目標をすばやく正確に確保し、地上軍の来援を待つことで、奇襲と迅速さがポイントだった。ちよつとした蘭車の狂いが、すべてを台無しにする可能性があったのだ。

わずか一本の進撃路

さらに問題だったのが第30軍団の進撃作戦である。実は緻密に練られていた空挺作戦に対し、地上部隊の計画はなにも等しいものだった。あったのは近衛機甲師団を先頭に、その後ろから第43歩兵師団が進む。

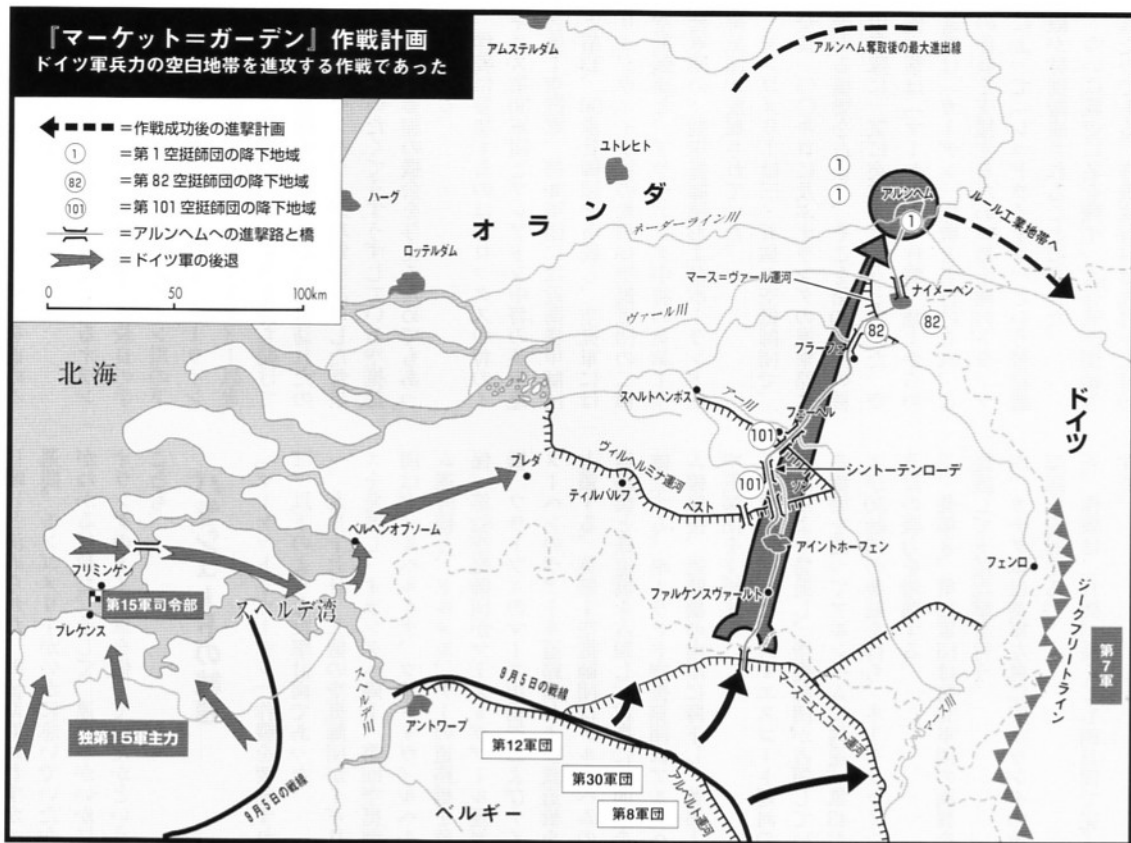
第50歩兵師団を予備とするという単純な計画だけであった。ひとことではいえない、空挺部隊の敷いたバラシユートの絨毯の上を、ただ進むだけだったのだ。たった一本の道路を、である。道中での戦闘や補給は考慮されていないかった。

第30軍団は、配下の第50（フーサンブリア）歩兵師団とともに、北アフリカでロンメルと戦ったイギリス軍の主力として、すでに名声を馳せていた。一九四四年九月の時点で指揮下にあった近衛機甲師団と第43（ウェセックス）歩兵師団、および先述の第50歩兵師団はノルマンディーの戦いで実戦経験を積み、作戦の主役を担うにふさわしい部隊と考えられていた。

だが、突破部隊の先頭を進むことになったアデア少将率いる近衛機甲師団は、おおよそこの作戦には不向きな部隊であった。この師団は第5近衛機甲旅団（戦車三個大隊、軽歩兵一個大隊）と、第32近衛歩兵旅団（歩兵三個大隊）から成っていた。これに偵察用の装甲車両を装備したウェールズ近衛連隊第2大隊が付属、さらに王立騎兵連隊第2大隊も臨時に配属されていた。

明らかに戦車偏重の編制である。確かに迅速な進撃には機甲部隊が必要だし、またおそらく、北アフリカの砂漠やフランスの平原なら強力な部隊であっただろう。しかし進撃予定の幹線道路はオランダの低湿地に土を盛り上げて造った高架線だった。そのため車両部隊は道路を外れることができず、追い越すは不可能。前方の部隊が停止

『マーケット＝ガーデン』作戦計画
ドイツ軍兵力の空白地帯を進攻する作戦であった



敗走を重ねる日軍集団の戦線は崩壊。指揮下の第7軍と第15軍の間には大きな間隙ができていた。この段階では、マーケット＝ガーデン作戦はあながち無謀な作戦ではなかったのだ。

すれば、全部隊が一本の道路に数珠繋ぎに立ち往生してしまう。その状態での戦闘など論外であった。第30軍団の各部隊は、作戦完了予定の四日分の物資を抱えて、ひたすら前進するしかなかった。

このことを考慮し、第30軍団は予備の第50歩兵師団から一個旅団を引き抜き、近衛師団の側面を援護させることにした。また師団の編制を若干変更し、第5近衛機甲旅団の戦車一個大隊を第32近衛歩兵旅団の歩兵一個大隊と入れ替えさせた。これで先頭部隊は戦車二個大隊プラス歩兵一個大隊(戦車一〇〇両、歩兵一〇〇〇名)となる。

また第30軍団の両翼では、第8軍団が右翼、第12軍団が左翼の援護を行うことになっていたが、ただでさえ少ない補給は両軍団までは行き渡らず、有効な支援は望み薄であった。軍団の側面援護は待ち受けている降下部隊と、戦術空軍による地上支援に頼ることとされた。もっとも、この空軍の支援も天候が悪化しないという条件付きだ

った。

前線部隊が、この細かい計画に不安に悩んでいたところ、モンゴメリはさらに大胆な作戦を練っていた。彼は迅速な進撃でライン対岸に橋頭堡を築けば、アイゼンハワーは自分を支援せざるをえなくなり、念願の大規模突破作戦に持ち込めると考えた。そのために、近衛機甲師団にはアルンヘム占領後さらに北上し、オランダ北部の飛行場占領と、そこへ予備の第51歩兵師団を空輸する計画まで、密かに立てていたのだ。

結局この作戦は、一枚のカードに賭けた大バクチであった。作戦が成功するためには、九月十七日からの数日間、イギリスとオランダ、ベルギーの天候が安定し、すべての必要な橋をドイツ軍に爆破される前に占領し、なおかつ有効な反撃を行えるドイツ軍部隊がオランダにいないことが最低条件だったのだ。そして実際には、そのすべてがかなわないという悲劇に見舞われるのである。想定される危険を看過した作戦であった。

脱出回廊『オランダのドイツ軍』

ドイツ防御戦線の「間隙」

では作戦地域のドイツ軍の実相はどんなものだったのだろうか。簡単にいえば、そこには、最初のような部隊もいなかったのだ。ノルマンディーから敗走した第7軍と

第5装甲軍はベルギーを経てドイツへと逃げ帰っていた。そして彼らに隣接してバ・ド・カレーにいた第15軍は、アントワープに近いスヘルデ河口に追いつめられ、包囲されかけていたのだ。つまり、第15軍と第7軍の間には、アントワープからルール

地方まで、広い間隙が開いていたのである。

九月に西方総軍の司令官に復帰したフォント・シユテット元帥は、すぐにこの危機的状況に気がついた。だが、バットン第3軍のザールへの突進も無視できない。

そこで彼はモーデル元帥のB軍集団司令官をアルンヘムに置いて北部の守りを監督させ、自身は南の戦区を直率することにした。さらにヒトラーに向けて「十分な増援が得られなければ、連合軍がライン川を越えて橋頭堡を築くであろう」と警告した。

寄せ集めの防御部隊

カナダ第1軍がアントワープを攻略した九月四日、ドイツ降下猟兵の生みの親クルト・シユトゥデント上級大將はヒトラーに呼び出され、新設の「第1降下猟兵軍」司令官に任命された。その任務は「あらゆる手段を用いて、連合軍のオランダへの侵入を阻止せよ」というものだった。ヒトラーは

連合軍の空挺部隊が大陸にいないことに警

戒感を抱き、オランダに降下作戦を伴う強襲上陸が行われることを恐れていたのだ。

事実、戦線後方への上陸作戦は半年前にイタリアのアンツィオで実行されていた。クレタ島降下作戦以来、ベルリンで降下猟兵の育成に務めてきたシユトゥデントにとって、このポストはその苦勞が認められた証であったが、大仰な名前はうらはらに、第1降下猟兵軍は配下に部隊を持たない書類上の司令部でしかなかった。

だがシユトゥデントは組織編成における高い能力を持っていた。また彼は一九四〇年の五月に、まさにこれから守ろうとしているオランダへ降下作戦を行った実績を持っていた。いまにも始まろうとしている連合軍の作戦に対抗するには、うってつけの人材だったのである。

彼は飛行場の守備隊などに任じていた空軍保安部隊を最前線のマース・エスコート運河へ送り、小規模な警戒線を張った。そして連合軍の動きを監視すると同時に、ベ

連合軍の戦闘序列

■マーケット作戦

第1連合空挺軍

英第1空挺軍団

英第1空挺師団

- 第1落下傘旅団
- 第1グライダー旅団
- 第4落下傘旅団
- その他部隊

ポランド第1空挺旅団

米第82空挺軍団

米第101空挺師団

- 第327グライダー連隊
- 第401グライダー連隊
- 第501落下傘連隊
- 第502落下傘連隊
- 第506落下傘連隊
- 第321グライダー軽砲大隊
- 第907グライダー軽砲大隊
- 第377落下傘軽砲大隊

米第82空挺師団

- 第504落下傘連隊
- 第505落下傘連隊
- 第508落下傘連隊
- 第325グライダー連隊
- 第320グライダー軽砲連隊
- 第376落下傘軽砲連隊
- 第456落下傘軽砲連隊
- その他部隊

■ガーデン作戦

英軍30軍団

- 近衛機甲師団
- 第43歩兵師団
- 第50歩兵師団
- 第8機甲旅団

※イギリス軍の旅団は連隊規模



第15軍と第7軍の間に、ドイツ軍は寄せ集めの部隊を配備させた。貧弱な野戦陣地につくドイツ兵。

ルギーから退却してきた友軍や、ドイツから送られてくる増援を受け入れ、即席の戦闘部隊を創りあげていったのである。

彼はまず、一九四〇年以來ずっとオランダに駐屯していた第79沿岸防衛師団と、本

れた。

こうした部隊の中には、イタリアから送られてきた軍紀違反で軍法会議にかけられた兵士を集めた、空軍第6懲罰大隊などという連中もいた。彼らはなんと、いまだに

国から送られてきた消化器系の疾患を患った兵士で編成された第176「療養」歩兵師団を配下に入れ、さらに編成中の第7降下

猟兵師団（兵力三個大隊相当）および、ノルマンディーで大損害を受け再編成中の第2降下猟兵連隊第1大隊と、第6降下猟兵連隊（一個大隊欠）をオランダへと呼び寄せた。両連隊が所属する第2降下猟兵師団本隊はブレスト港で包囲されていた。

またシュトゥデントは、ライン川東岸で編成されていた第107装甲旅団をはじめ、各種の訓練大隊や、海軍歩兵大隊などに、急いでオランダへ向かうよう命令を出した。オランダに隣接するドイツ本国の第6軍管区には、同地で編成された部隊は可能な限り早くオランダへ送るようにとの命令が下さ

南方戦線用の軍服を着たままだったのである。このような雑多な部隊を、前線の各級指揮官は素早く使用可能な兵力に仕立て上げた。ドイツ軍はそうした経験が豊富だったのである。各戦隊は「ヴァルター戦闘団」といったようにその指揮官の名前で呼ばれたが、これによって兵士たちは自分が所属している部隊の明確なヴィジョンを持ち、結束を高めることができた。

またドイツ軍の各師団は、部隊ごとに補充部隊を持っていた。各戦隊指揮官は未熟な補充兵や敗残兵たちをこの野戦戦闘している間に、部隊としてのまとまった訓練を施し、その後で戦闘に投入するという手法を採っていたのだ。つまり連合軍が想像するよりもはるかに早く、ドイツ軍は防衛体制を整えつつあったのである。

SS装甲部隊

一方、こうした寄せ集めの第1降下猟兵軍に加え、装甲部隊も到着しつつあった。オランダはもともと西方総軍ではなくOKW（国防軍総司令部）の直接の指揮下にあり、オランダ駐留軍司令部の配下に第88軍団が置かれているだけだった。第1降下猟兵軍の投入によってオランダの戦線は西方総軍の指揮下に入り、同時にオランダ

駐留軍司令部もB軍集団の配下に編入され、戦線後方の組織編成を担当することになった。

六月二十九日以来、二か月間休まず戦ってきたSS第9装甲師団「ホーフェンシュタウフェン」はオランダへ退却した。師団の兵力は約二五〇〇。師団長は退却戦のさなかに負傷し、師団の指揮はハルツァーSS中佐が執っていた。姉妹師団のSS第10装甲師団「フロンツベルク」のほうも同じく大損害を受けてオランダへ後退。その兵



寄せ集め部隊のなかには、ドイツ各地から急速集められた精鋭の降下猟兵部隊も存在した。

A BRIDGE TOO FAR

力は三〇〇〇ほどである。第2SS装甲軍団長ヴィルヘルム・ビットリヒSS中将率いる、この二つのSS師団は早速オランダ駐留軍司令部に配属され、アルンヘム北部にて再編成を開始した。

このようにSS軍団がアルンヘム地区に駐屯したのは偶然ではない。もともと東部戦線で損害を受けた武装SS師団は、再編成の際にフランスやベルギー、オランダを駐屯地に選ぶことが多かった。これは連合軍の反攻に備えるためであると同時に、占領地のレジスタンスを威嚇するためである。そしてレントシユテットは今回も、弱体化したとはいえエリートである第2SS装甲軍団を、オランダの危険な回廊へと配置したのである。

そして、こちらは偶然だが、SS第9装甲師団は一九四三年の創設時に、対降下作戦のための訓練を行っていた。連合軍によるフランスへの上陸作戦は空挺攻撃を伴うであろうから、それに対処するためにだった。そのため、彼らは空挺攻撃のシヨックから、すばやく回復する能力を持っていたのである。

また、オランダにはさらに、武装SSの各種後方部隊も駐屯していた。第4、第12、第16の三個のSS訓練大隊、SS下士官教育隊、そしてオランダ人義勇兵大隊などである。こうした部隊はもちろん、最前線に送られるような生粋の戦闘部隊ではない。だが、重装備こそないものの彼らは若く、戦争に疲れておらず、祖国を守る熱意に燃

えていた。彼らを率いるのは経験豊かな下級士官や下士官たちである。

逆説的だが、ドイツ軍がこれまでの戦いで大損害を出していたことが、かえって兵士たちを若くフレッシュな人材で満たしていたのだ。損害が少ないうえに長い間戦場で戦い続け、疲れ切っていた連合軍兵士とは対照的である。東部戦線では次々に繰り出される赤軍新兵に疲れさせられたベテランのドイツ兵も、ここでは若い兵士に触発され、祖国の危機に心機一転、やる気を出し始めていた。

いないはずのドイツ軍

加えて、スヘルデ河口から退却してきた第15軍も、オランダへ到着しつつあった。真つ先にやってきたのは第85歩兵師団の残余で、師団長クルト・チル少将は、一緒に逃げてきた第84、第89歩兵師団の敗残兵をまとめてチル戦闘団を形成した。かつて英仏海峡を防衛していた第59、および第25歩兵師団も、相次いでスヘルデ河口を渡り、オランダへ入った。

シュトゥデントは、軍参謀のヴァルター大佐に寄せ集めの部隊でカンブルグッペ戦闘団を編成させ、英第30軍団の正面に配置した。そしてその右翼にチル戦闘団を、左翼にドイツから送られてきた第176歩兵師団を送り込んだ。B軍集団司令官モーデルは彼に對しさらに、アルンヘム北方で再編成中のSS軍団から、それぞれ一個装甲擲弾兵大隊を若干の戦車と駆逐戦車で増強し

た二個戦闘団を与えた。

こうして所属師団もばらばらの混成部隊ではあったが、九月の最初の二週間で三二個大隊の兵力が最前線に集結したのである。不足していたのは重火器であったが、幸い、オランダの橋梁や飛行場を守るため、多数の八・八センチ対空砲があった。これは野砲としても対戦車砲としても使える優れもので、ドイツ軍の火力不足を大いに補った。もっともドイツ軍上層部にも齟齬がなかったわけではない。オランダを守る部隊はあるものは第1降下猟兵軍(空軍)に、あるものは第15軍(陸軍)に所属していた。またビットリヒの第2SS装甲軍団(武装SS)はB軍集団の直轄であった。

つまりドイツ軍は前線の部隊だけでなく、上級司令部も寄せ集めだったのだ。だがしかし、彼らには連合軍にはない利点もあった。長年の戦いから、陸軍と空軍地上部隊、そ

して武装SSはそれぞれの政治的対立を越え、戦友として共に戦うすべてを心得ていた。さらにB軍集団司令部と第1降下猟兵軍、および第2SS装甲軍団の各司令部は互いにかなり近くにあり、綿密な連携が可能だった。ベテランの各級指揮官たちは、敗残兵をまとめ、臨機応変な作戦を独自に決断できた。要するに、連合軍が「とるに足らない」と想定していたオランダのドイツ軍は、意外にもしぶとい防衛部隊となっていたのである。

こうした事実は連合軍にも知らされていた。前線部隊は前方の敵陣に兵力が集結しつつあることを報告し、オランダのレジスタンスは「アルンヘムに武装SSの装甲師団がいる」と伝えてきていた。だが、彼らはこれを無視したのである。「そんなはずはない」と。「ドイツはもう負けているはずだ」と。それは戦ってみるまでわからなかった。

アルンヘム・ナイメーヘン戦区のドイツ軍主要部隊 (9月17日)

第1降下猟兵軍

第6降下猟兵師団
降下猟兵訓練部隊
第719歩兵師団(オランダ駐留軍より)
第176歩兵師団(9月6~7日)
チル戦闘団=第85、84、89歩兵師団残余(9月4~5日、第15軍より)
ポッペ戦闘団=第59歩兵師団残余(9月16~17日、第15軍より)
キューグラール戦闘団=第245歩兵師団残余(9月16~17日、第15軍より)

オランダ駐留軍

ヘルマン・ゲーリング師団訓練部隊
アルンヘムSS下士官学校生徒隊
第184砲兵連隊(1個大隊、砲無し)
オランダ義勇SS大隊
※上記部隊はすべてオランダ駐留教育軍司令官フォン・テックウ中將指揮下にフォン・テックウ臨時編制師団を編成

第7軍

第406歩兵師団

B軍集団直轄SS第2装甲軍団

SS第9装甲師団
SS第10装甲師団

※日付は戦区への到着日



作戦発動。その日、オランダ南東部の空は連合軍の輸送機とパラシュートの花に覆われた。

空挺降下

作戦は九月十七日に開始された。まず未明に英空軍爆撃コマンド、夜明けには米第8空軍によってドイツ軍の対空砲陣地と空軍基地に爆撃が行われた。続いて、降下部隊を乗せた輸送機、および爆撃機に牽引されたグライダー、総計二〇〇〇機あまりが昼前にオランダへ飛来した。攻撃は完全な奇襲であった。

米第101空挺師団六八〇〇名は、降下後、連隊ごとに集結を済ませ、アー川とツイット＝ヴィルヘルム運河が平行するフェーヘルの街、ドルメル河畔のシント＝デンローデの道路橋、ヴィルヘルミナ運河橋のあるソンを目標とした。

第82空挺師団六五〇〇名および砲兵隊は、ナイメーヘンの東、フロースベークの丘陵地帯を二個連隊プラス砲兵大隊で確保した。ドイツ国境からの反撃を防ぐためである。このうち、第504連隊だけは西側へ向かい、フラーフェのマース川橋梁と、ナイメーヘンの南に位置するマース＝ヴァール運河の五つの橋を目標とした。運河橋はひとつしか確保できなかったが、フラーフェの重要な橋は首尾よく占領した。

英第1空挺師団はアルンヘム北西部へと

作戦発動

送られ、ヴォルフヘーゼ周辺に集結した。これで地上軍出撃の体制が整った。

最初の躓き

降下作戦から遅れること三時間、いよいよ地上部隊の攻撃が開始された。近衛機甲師団の兵士たちは上空を通過する第101空挺師団の輸送機を見送りながら、彼らが首尾よくすべての橋を確保してくれることを祈りつつ、出撃を待ち続けていたのだ。

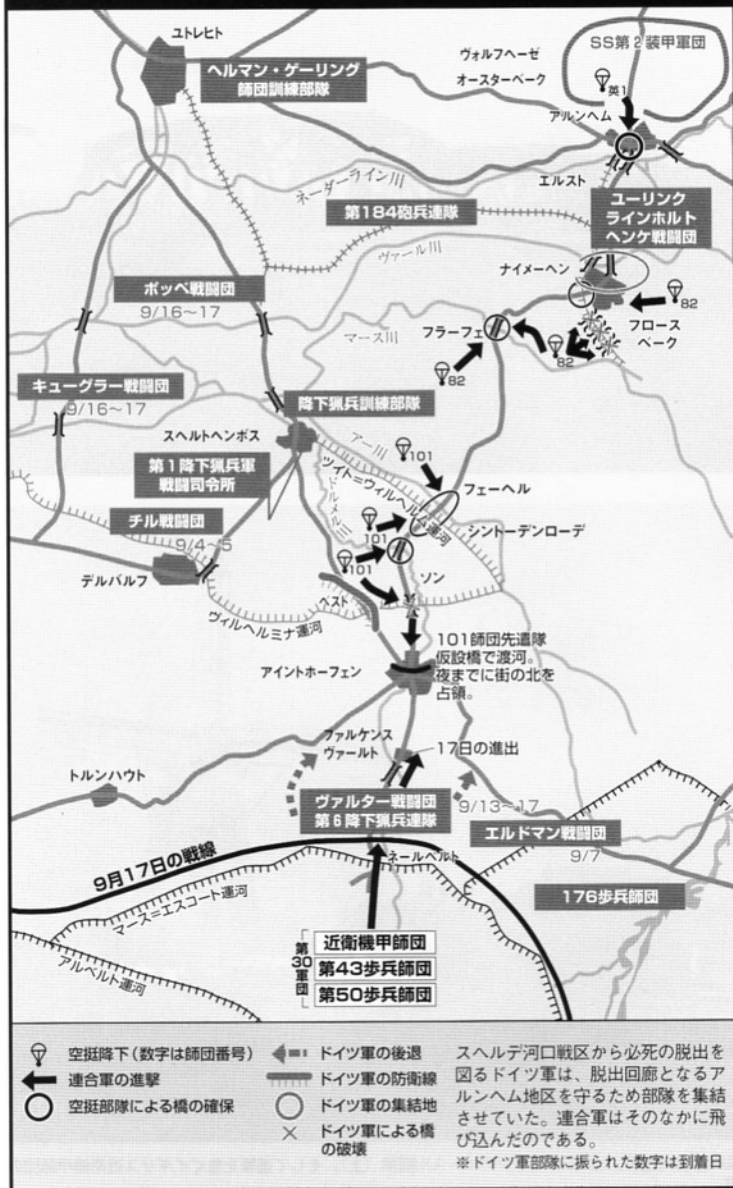
午後三時、まず第30軍団の四〇八門の砲兵が火蓋を切り、前線に三〇分間に渡って砲弾を降らせた。これに二〇〇機のロケット弾を積んだタイフーン戦闘爆撃機が続く。こうした援護の後、第30軍団の戦闘部隊であるアデア少将の近衛機甲師団が進撃を開始した。目標はアインントホッフエン。予定では午後四時にファルケンズヴァールトの橋梁を渡り、夕暮れまでに市街へと到達する手はずとなっていた。そしてそこには、第101空挺師団の兵士が待っているはずであった。うまくいけば翌日には一〇本の橋を渡り、戦いもせずにドイツへの玄関を蹴破ることができるはずだ。モンゴメリーはそう考えていた。

だが、戦いはいきなり予想外の展開を見せる。先陣を務めるアイリッシュ近衛機甲

A BRIDGE TOO FAR

9月17日<作戦開始当日(D-Day)>

—そこにドイツ軍はいないはずであった—



連隊第2大隊のシャーマン戦車は履帯をきりませ、もうもうと排気ガスをまき散らしながら進み始めたが、すぐに道路両脇に潜んだ降下猟兵や、彼方の森に身を隠したハ・八センチ対空砲、そしてSS第10装甲師団から派遣されてきたリヒター戦闘団(集成一個大隊、ヴァルター戦闘団に配属)のIV号駆逐戦車の猛攻撃を受けたのだ。兵力の少ないドイツ軍にも、ハ・八(アハト・アハト)ならたくさんあったのだ。

先頭中隊の最後尾にいたシャーマンがまず撃破され、続いて先頭車両が火を噴いた。これで土手道に連なる戦車隊は身動きがとれなくなってしまう。そこへ降下猟兵が至近距離からパンツァーファウスト(携行式の対戦車ロケット弾)を撃ち込む。たちまちにしてシャーマン八両(九両とする史料もある)と装輪装甲車二両が擱座。迅速な突破は、いきなりの激戦になってしまったのだ。

彼らはなんとか歩兵を前に出し、戦闘爆撃機を呼んで障害となっていたハ・八センチとIV号駆逐戦車を排除。前進を再開したが、行く先で側面からのドイツ軍の攻撃に遭遇。いちいちこれを排除しなければならなかった。

近衛機甲師団の先頭は、夜までにアイントホーフェンどころか中間地点のファルケンスヴァールトへたどり着くのがやっとだったのである。第30軍団と同時に両翼で進

撃を開始した第8軍団と第12軍団に至っては、支援部隊や補給を第30軍団に集中させていたため有効な攻撃が行えず、ほとんど前進していなかった。

こうして作戦初日の日が暮れた。作戦は順調とはほど遠いスタートだった。だが、この事態は予想できたはずだったのだ。実は攻撃開始の前々日、近衛機甲師団は進撃の拠点となるマース＝エスコート運河のネールベルト橋頭堡に攻撃を受けていた。また攻撃前後には、運河の一本だけ確保していた橋梁に、ドイツ海軍のダイバーが爆薬を仕掛けようとしていた。こうした予兆を、英軍は見逃していたのである。

一方、最前線のドイツ軍は連日増してくる通信量や装甲車両の轟音によって、連合軍の攻撃が近いことを予感していた。そして空挺部隊の上空通過で、この予感は確信に変わった。ヴァルター戦闘団はすでに、やってくるであろうシャーマン戦車に狙いを定めていたのであった。

ソーン橋

九月十八日朝、近衛機甲師団は戦いながら前進を再開した。今度は、夜のうちに進撃路の左右に偵察部隊を出して、反撃を警戒しての進撃だった。相変わらず戦いは続いたが、ドイツ第1降下猟兵軍の各隊は街道の左右に分散されており、その統率は混乱していた。戦車隊を苦しめるハ・八センチも牽引車両を持っていなかったため、一度突破されてしまえば放棄するしかなく、



第82空挺師団第504連隊が占領したナイメーヘンのマース川橋梁（上）。そして進撃を急ぐイギリス近衛機甲師団のクロムウェル戦車。

それ以上の脅威にはならなかった。

こうして午後七時、最初の戦車部隊がアイントホーフェンの町へと入った。すでに町にはその日の午後、北からやってきた第101空挺師団の先遣隊も到着していた。第101空挺師団は第30軍団に編入され、かわりに第50歩兵師団は隣接する第8軍団へと配置換えとなった。これによってようやく、両

翼の支援攻撃が軌道に乗り始めた。アイントホーフェン以南の進撃路は安全になった。

近衛機甲師団の兵士はようやく友軍に出会うことができ、ほっとした。これで戦わずともアルンヘムまで到達できるはずだ、と。だが、ことはそう簡単ではなかったのだ。比較的順調だった第101空挺師団の計画にも綻びが生じていたのである。フェーヘ

ルとシントーデンローデは若干の戦闘で確保したものの、ヴィルヘルミナ運河の橋があるソンの村では八・八センチ対空砲が激

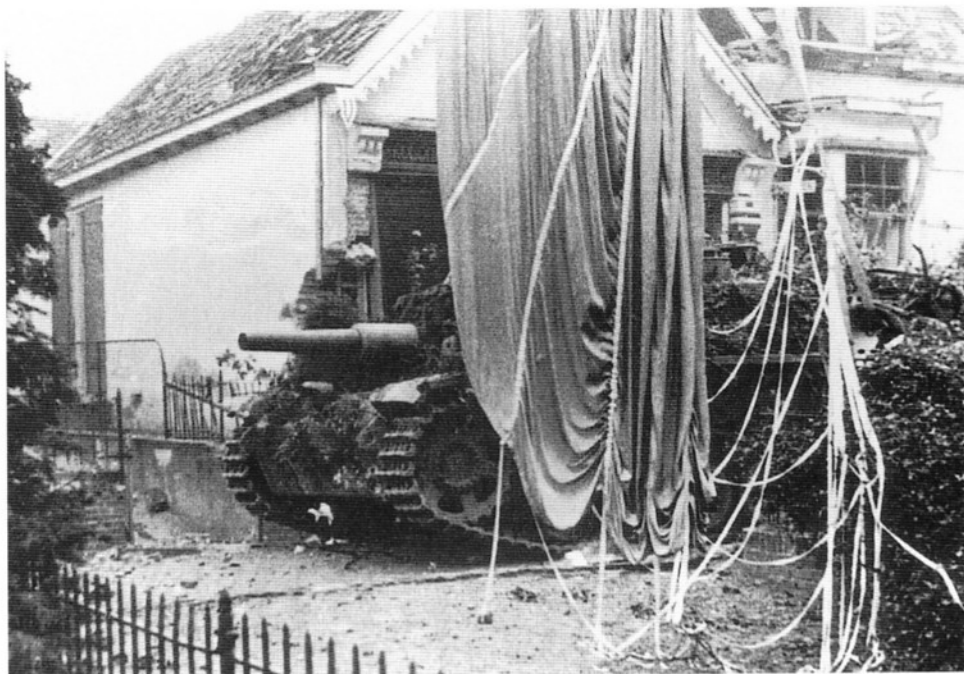
しい抵抗を見せ、ようやく、これを制圧した空挺兵の目の前で、橋が爆破されてしまったのだ。ティラー師団長はもうひとつの橋がある西側のベストヘ兵力を差し向けたが、そこにはタッチの差で現れたドイツ軍

が居座っていた。

この敵軍はスヘルデ河口から退却してきたボッペ中将の第59歩兵師団だった。マーケットIIガーデン作戦のために航空戦力を集中したため、彼らの後退を空軍は阻止できなかったのだ。またカナダ軍も補給を後回しにされたため、その退路を遮断することに失敗していた。マーケットIIガーデン作戦のための処置が、作戦そのものを妨害し始めていたのである。こうして、スヘルデ河口から後退してきたドイツ軍は、今度はアメリカ軍が占領したシントーデンローデとフェーヘルに対して、反撃を開始していたのだ。

もはや第30軍団の進撃も一日の遅れを生じている。急がねばならない。だがアイントホーフェンの市街には解放を喜ぶオランダ市民が溢れ、近衛機甲師団は市街の通過に四時間を費やしてしまう。ようやく町を抜けても、橋梁があるベストはまだ戦闘中である。

急遽、渋滞を縫って第30軍団の工兵隊が呼ばれ、破壊されたソン橋にペイリー仮設橋を作り始めた。だが、これでまたもや大幅な遅れが生じ、前進は十九日の朝まで行えないこととなった。モンゴメリーはアーカートに「二日でアルンヘムにいくぞ」と豪語していたが、その時点ではまだ二つの橋を渡ることしかできない。すでに進撃は三六時間も遅れてしまっている。そして第82空挺師団と第1空挺師団が待っているはずのナイメーヘン、そしてアルンヘム橋は、まだはるか遠くにあった。



ドイツ軍は、機甲戦力を中心に反撃作戦にでた。Ⅲ号突撃砲10.5cm砲搭載型（上）とかなりくたびれたSd. Kfz250装甲兵員輸送車（下）。

遙かなる橋 『攻撃頓挫』

ナイメーヘン到着

ようやくソン橋の修理が終わった九月十日早朝、近衛機甲師団は再び動き出した。

フェーヘルとフラーフェの間には両翼から接近する道路が少なく、ドイツ軍はほとんどいなかった。戦車隊は第82空挺師団が待つフラーフェ橋を午前八時半に通過。破竹の勢いでナイメーヘン郊外へと達した。これまでナイメーヘンの東にあるフロースベーク高地をドイツ軍による攻撃からなんとか支えていた第82空挺師団は、ようやく機甲師団の助けを借りてナイメーヘン市街に攻撃をかけられるようになった。

だがそのころナイメーヘンでは、フェーリーを使ってネーダーライン川を渡ったSS第10装甲師団のユーリンク、ラインホルト両戦闘団、そして降下猟兵訓練大隊を基幹とするヘンケ戦闘団が、がつちりとヴァール川にかかる二つの橋梁を確保。連合軍の前進を再び止めてしまった。さらに第30軍団は、ナイメーヘンにいた第1空挺軍団司令官ブラウニング中将から、最終ゴールであるアルンヘム橋はドイツ軍の激しい攻撃に晒され、わずか一個大隊が確保しているにすぎないことを知らされた。

第82空挺師団長ギヤビン准将は、配下の一個大隊にヴァール川を強行渡河させ、ナイメーヘン橋を北から奇襲占領するプランをホロックス中将に申し出た。これは危険な作戦だったが、すぐに後方からサポートを持つてくるよう、第30軍団が手配することになった。戦いはドイツ軍がアルンヘム橋を奪回するか、連合軍がその前にナイメーヘン橋を占領できるかというきわどいレースになっていたのだ。

炎上する「ガーデン作戦」部隊の車両縦列。たった一本の補給路は、ちょっとした攻撃で寸断され、進撃はそのたびに大幅に遅れた。



ドイツ軍反撃開始

このころ、奇襲のショックからさめたドイツ軍は、一連の反撃を組織していた。反撃は戦闘団ごとのちぐはぐなものだったが、連合軍には時間がなかった。ちょっとした攻撃が、すぐに進撃の遅延につながったのである。シュトゥデントは戦闘の初日に、米軍のグライダーからマーケットIIガーデン作戦の概略を示した計画書を手に入っていた。そのため、少ない兵力を進撃路の効果的な地点に送り込むことができたのである。

十九日の午前中に第30軍団は初めて順調に進撃できたが、これは風の前の静寂であった。その日の午後、後方連絡線のソン橋に向けて、ついにドイツ軍の強力な反撃が開始されたのだ。

第101空挺師団戦区に行われていた西からの第59歩兵師団の攻撃に加え、ソン橋の東側から、第107装甲旅団のパンター戦車隊が姿を現したのだ。そこはすでに近衛機甲師団が通過した後だった。

第101空挺師団は第30軍団直属の第8機甲旅団の助けを借りて、正午過ぎにポッベ戦闘団を撃退、

街道が両翼から挟み撃ちにされるのを未然に防ぎ、それからドイツ軍のパンター戦車による反撃を迎え撃った。兵力が足りないため、第101空挺師団はグライダーのパイロットを集めて臨時の歩兵を編成して補っていた。

攻撃に適さない地形だったうえ、ポッベ戦闘団との協同攻撃に失敗した第107装甲旅団は、数両のパンターを失って後退した。この日ちょうど、天候のために遅れていた空挺部隊の増援と補給がようやく届き、第101空挺師団に対戦車砲が増強されていたのも大きかった。

だがこうした反撃はこの後、さらに繰り返されることになる。たとえ廊下が遮断されなくても、進撃路の近くで戦闘が行われれば、進撃は停止してしまふ。第101空挺師団は、西部劇に登場する、線路を襲撃するインディアンのようなドイツ軍に、終始悩まされることになるのだ。そして彼らを救うべき騎兵隊はすでに通り過ぎてしまったのである。

ナイメーヘン

九月二十日、再び進撃は停止した。連合軍はヴァール川の橋梁を占領できず、またフロースベークへのドイツ軍の攻撃が激しくなったため、近衛機甲師団は配下の各部隊を、フロースベーク高地の防御、フラーフェ橋の防御、そしてナイメーヘン攻撃とに分割せざるをえなくなっていた。

また、第101空挺師団戦区には、再びドイツ

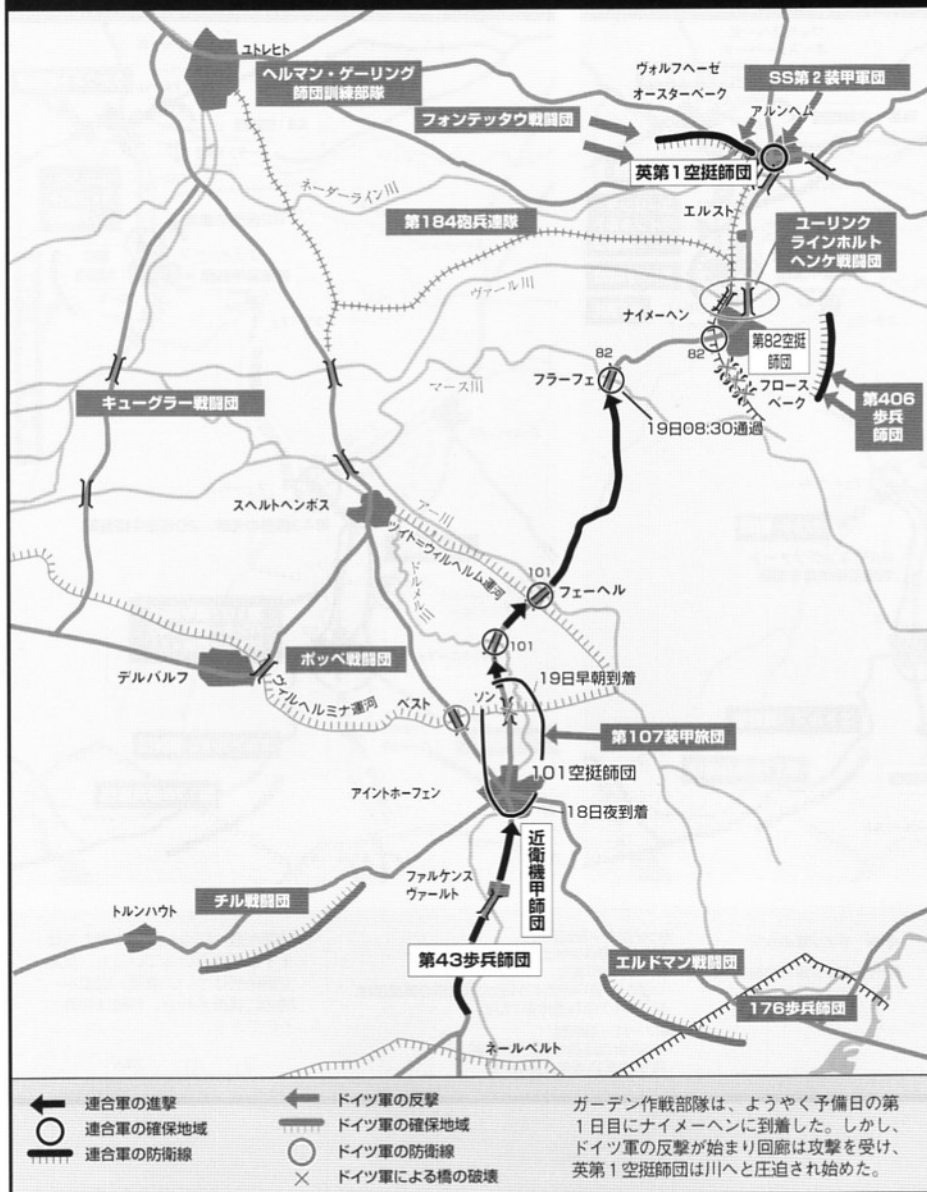
第107装甲旅団の攻撃が行われていた。米軍兵士は次の攻撃は別の場所へ来ると予想していたが、彼らは裏をかき再び同じ地点へと攻め込んだ。そのため英第8機甲旅団がまたもや、反撃する第501落下傘連隊の支援にかり出され、軍団の先頭を支援することが不可能になってしまふ。

彼らが必要で守っている街道を後続の英第43歩兵師団と、強襲渡河用のボートとを積んだトラックが前進していく。第43歩兵師団の先頭である第130歩兵旅団は、二十日の正午頃、近衛機甲師団に二七時間遅れてフラーフェへと到達した。ところが、その先の道路は前を行く近衛機甲師団の後方部隊がひしめき合っていて、通れなかったのである。進撃部隊はまたもや一本の道路上で動きがとれなくなってしまうのだ。

こんなところをドイツ軍に襲われたらひとたまりもない。なにしろフラーフェIIフェーヘル間はほとんど防御部隊がいないのである。この危機を打開するにはナイメーヘン橋を開通するしかない。そのためには、遅れているボートを一刻も早く前線に届けなければならぬ。そこで歩兵部隊は隊列を崩し、なんとか街道にボートを積んだトラックが通れるように道を空けたのである。こうして、ようやくその日の午後にはボートが到着。クック少佐に率いられた第82空挺師団第501落下傘連隊第3大隊の兵士たちは、ナイメーヘンの一・六キロ西方でヴァール川を強行渡河した。補給が滞りがちだったため、支援砲撃や煙幕が十分でなく、

9月18～19日(D+1～2)

—ガーデン作戦部隊ナイメーヘン到着 ドイツ軍反撃開始—



ガーデン作戦部隊は、ようやく予備日の第1日目にナイメーヘンに到着した。しかし、ドイツ軍の反撃が始まり回廊は攻撃を受け、英第1空挺師団は川へと圧迫され始めた。

損害は大きかったが、彼らは北岸からから橋梁へ向かい、見事に橋を占領した。
だが近衛機甲師団はアルンヘムには向かわなかった。作戦当初にドイツの対戦車砲で痛い目に遭っていた彼らは、ナイメーヘン

ン北部の高架線道路が恐ろしい異に見えた。ネーダーラインとヴァールの両河川に挟まれた地域は、このあたりでもっとも地面が軟弱なところだったのである。歩兵の支援なしに進むことはできない。第82空挺師

団は四日間の戦いで大損害を出し、もはや使い物にならなかった。
軍団命令も近衛機甲師団に、第43師団の到着を待てと命じていた。だが彼らはフラフエでの渋滞に巻き込まれたうえボート

の前進を優先させたため、夜までにはナイメーヘンに来られそうもなかった。血みどろになって橋を占領したクック少佐と師団長ギャビン准将は激怒したが、どうしようもなかった。

そのころ、一五キロ北方のアルンヘムでは、必死で援軍を待ち続けたフロスト中佐の英軍空挺部隊が、まさに全滅しようとしていたのである。

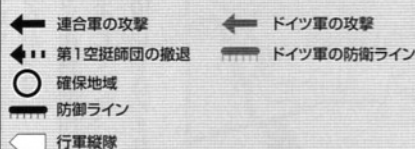
作戦失敗

九月二十一日、第30軍団がぐずぐずしている間にアルンヘム橋がついに陥落した。ドイツ軍は橋を渡り、アルンヘム＝ナイメーヘンの中間に位置するエルストに第506重戦車大隊のケーニヒスティーガーを含むクナウスト戦闘団を送り込んできた。近衛機甲師団と、第43歩兵師団の前進はこれで完全に阻止されてしまった。同時にドイツ軍はネーダーライン北岸に残っている第1空挺師団本隊をアルンヘムの西にあるオースターベークにおいて包囲殲滅しようとしていた。

また、二十二日、二十三日にかけて、再び後方の第101空挺師団戦区にドイツ軍の大規模な反撃が行われた。今度は師団戦区北部のフェーヘルに対してである。東からは先の第107装甲旅団に加え、後退してきたヴァルター戦闘団のSS部隊が、一方、西からはやはり前線から後退してきたフォン・デア・ハイテ大佐の第6降下猟兵連隊と、第59歩兵師団指揮下のフーパー戦闘団が攻

9月22日～26日〈作戦予定日数+1～4日〉

作戦頓挫



- ヴァルター戦闘団
・第16擲弾兵連隊の1個大隊
・第107装甲旅団
・SS第10装甲師団より1個大隊規模の集成部隊
・第18降下猟兵連隊第1大隊
- フーバー戦闘団
・第59歩兵師団の3個大隊基幹
・第559駆逐戦車大隊の1部

時間が経つにつれ彼等の戦力差はますますひらいていった。英第1空挺師団はついに潰滅。回廊も一時的に遮断された。作戦は失敗したのである。

0 10 20km

9月20～21日〈D+3～4〉

ヴァール川渡河のためガーデン作戦軍、進撃路で立ち往生



撃をかけた。フーバー戦闘団は三個大隊の歩兵に二センチ対空機関砲（これは地上掃射に恐るべき威力を発揮した）、一〇五ミリ榴弾砲大隊、そして第59独立駆逐戦車大隊の四両のヤクトパンターまで保有する強力な諸兵連合部隊だった。

これらの攻撃は繰り返し繰り返し反復された。米軍は必死で防戦に努めたが、ついに二十四日、降下猟兵訓練部隊で編成されたユングヴァート戦闘団が、フェーヘル＝シントーデンローデ間で回廊を遮断してしまふ。ヴァール川北岸にいた第30軍団への補給はこれで途絶えてしまった。もはやこれ以上の進撃は不可能であった。

この状況のなか、連合軍はついにネーダーライン北岸の放棄を決意。第30軍団はネーダーライン南岸に遅れて降下したボーランド落下傘旅団とともに、オースターペルクに孤立する第1空挺師団を救出するため、町の対岸にあるドリエルヘトに向かった。

九月二十五日夜、わずかに一七〇〇名の空挺師団兵士と数百名のグライダー・パイロット部隊が夜陰に紛れて友軍陣地へと泳ぎ帰った。第1空挺師団は事実上壊滅したのである。第30軍団は退却してきた彼らを迎え入れ、ヴァール川北岸の橋頭堡を確立することになった。血と硝煙にまみれて五日間戦つてきた第1空挺師団の生き残りは、出迎えた第30軍団の兵士に向かって小さく「おまえら、いままでどこにいたんだよ」とつぶやいた。

A BRIDGE TOO FAR

橋はなぜ遠かったのか「総括」

収支決算

こうして「マーケット・ガーデン」は失敗した。連合軍はネーデルライン北岸に橋頭堡を築くことはできず、作戦は「ドイツの玄関」を蹴破るところか、ちよつとノックしただけに終わった。

この戦いで連合軍は一六四機の輸送機と一三二機のグライダーを失い、七五〇名のパイロットが犠牲になった。第8空軍の爆撃機も二二五機が失われた。第1空挺師団は七〇〇名の損害を出して全滅し、米第82および第101空挺師団は合計で三六六四名の損害を出した。地上部隊は第30軍団の一五〇名を含む五三〇〇の死傷者を出している。連合軍の損害は合計で一六六〇〇名に達した。

対するドイツ軍は六八〇〇〇名前後の損害を出し、一両のケーニヒスティーガーを含む数十両の戦車を失った。だが、スヘルデ河口を渡った第15軍は連合軍の戦術空軍が「マーケット・ガーデン」にかまけている隙に、約六万五〇〇〇の兵力を無事にドイツへと逃げ帰らせることができた。そして、機雷で封鎖されたアントワープ港は二か月後の十一月二十六日まで使用不可能であった。当初の作戦目的はなにひとつ達

成できなかったのである。

モンゴメリーはこの作戦を「九〇パーセント成功だった」と後に語った。確かに進撃した距離は九割、確保した橋梁も九割である。より長期的に見れば、一九四五年の春、イギリス軍はこの占領地を足がかりにドイツへと進撃したことも、さらにドイツ軍にとって貴重な第2SS装甲軍団を消耗させたことも事実である。だがこれは一個空挺師団を全滅させた代償としては、あまりにも小さな戦果であった。

橋は遠すぎたのか

では「マーケット・ガーデン」はどうすれば成功したのであろうか。モンゴメリーの主張を受け入れ、バットンを停止させ、ホッジスの米第1軍と一体となって、九月の初頭にオランダに攻め込めばよかったのだろうか。

もちろんこれは政治的にあり得ない話だ。さらに、この可能性は、ドイツ軍に反撃能力がないことを前提にしている。第15軍はやはりドイツへ逃げ帰り、その途中で連合軍の脆弱な補給線を寸断できる。作戦を失敗させたのは補給の量だけではなく、ドイツ軍の反撃力だったのだから。

天候の悪くなる秋、戦線の遙か奥深くに側面を晒したまま突入するという、この網

渡りの作戦は、たとえ成功したとしてもモンゴメリーの期待したような成果は得られなかったであろう。ドイツ軍は心臓部であるルールを死に物狂いで守り、連合軍の危険な側面を貫いたかもしれない。後に第30軍団長ホロックス中将は「一個軍の補給線を道路一本で断つてはいけない」と言い残

している。

結局、ルールへの突破はモンゴメリーの見果てぬ夢であった。戦争は年末ではなく、翌年の五月まで続いたのだ。そしてドイツに最後の余力を吐き出させたのは、連合軍の攻撃よりも、ヒトラーの「無謀な」アルデンヌ攻勢だったのである。



インベシオン・ストライプ（識別標識）も鮮やかな撃墜された連合軍機の翼を横目に進むドイツ軍ヴェスベ自走砲。モンティの壮大な作戦は潰え去った。